大学合唱団の戦後史

――うたごえ運動・大学紛争・高度経済成長――

河西秀哉

はじめに

大阪音楽大学音楽文化研究所が昭和四十七年（一九七二）四月から翌年一月まで、大阪府・京都府・兵庫県・滋賀県・奈良県・和歌山県の近畿二府四県の大学（短期大学を含む）・高等学校における学校公認の音楽関係クラブの参加学生・生徒数および参加率に関する調査を行った結果がある。それを大学分のみ表にまとめた。

これを見ると、合唱・管弦楽・吹奏楽・ギターマンドリン合奏を含む洋楽全般に取り組む学生は二二一団体で一万九七〇人、全学生のおおよそ三・五六％である（邦楽は〇・八三％）。それぞれを見てみると、ギターマンドリン合奏が最も多く、九二団体で四六九〇人、全学生の一・五二％にあたり、次に合唱が一〇二団体で四六一〇人、全学生の一・五〇％となっている。その後、管弦楽・吹奏楽と続く。ただし、団体数ではギターマンドリン合奏よりも合唱の方が多い。この時期の大学生のなかで、合唱は大学生の音楽サークルとしては大きな割合を占めていたのである。ただし、詳しくは後述するように、この数値の最大値は減ったなかでの統計であった。アジア・太平洋戦争の敗戦後、新制大学が設立されるなかで、学生のサークル活動も盛んになっていく。合唱も戦前の団体が復活、もしくは新しく団体が設立され、大学内の音楽サークルとしては花形の位置を占めることとなった。百人を超える大学合唱団[1]が、学内に複数存在するケースもあった。たとえば、昭和三十八年（一九六三）三月に京都大学の合唱団である京大合唱団が北陸地方を中心に春の演奏旅行を行ったが、その際に途中までは男声のみで八十人、途中から女声を加えて総勢百五十人の合唱団であったという[2]。大学合唱団の社会的な影響も大きく、定期演奏会には千人から二千人規模の聴衆を集める場合もあった。先ほどの京大合唱団の演奏旅行も三月七日から十七日まで、金沢・福井・武生・鯖江・敦賀・長浜・南舞鶴・福知山などをまわり、各地の講堂・公会堂で演奏会を実施していた。それだけ、大学合唱団の演奏を聴きに来る観客がいたということになる。

このように、戦後のある時期まで、大学合唱団は日本社会に大きな影響力を持っていた。そして、そうした状況が次第に変化をしていく局面があった。それは、一九六〇年代後半に全国の大学を巻き込んで展開された大学紛争がきっかけであったと思われる。また、同時期に進行して

表　大学公認の音楽関係クラブの参加学生・生徒数および参加率に関する調査

	活動学生数を確認した団体数（団体）	活動を確認した団体の推定学生数（人）	一団体平均団員数（人）	全校推定団体加入率（%）
邦楽全般	90	2,570	21.8	0.83
洋楽全般	221	10,970	34.6	3.56
合唱	102	4,610	32.0	1.50
管弦楽	17	1,100	40.8	0.36
吹奏楽	10	570	27.3	0.19
ギター・マンドリン合奏	92	4,690	37.2	1.52

西岡信雄編集『関西学生音楽活動総覧』（大阪音楽大学、1973年）より作成
全校総学生数は308,873人で計算

いた高度経済成長[3]も、大学合唱団に大きな影響を与えた。

歴史学においては近年、社会運動の具体的な側面に関する研究が進んでいる。そのなかで、社会運動のなかでの文化的活動についても、検討がなされつつある。とはいえ、大学に関係する事項の研究は教育学の教育史のなかで検討される傾向にあり、歴史学のなかでは若干は触れられることはあるものの、本格的になされることがない。それゆえ、社会運動史や文化に関する研究は進みつつも、大学合唱団の歴史的意義については検討の対象外となってきた。一方、教育学における教育史のなかでは、これまで大学制度に関する研究の蓄積がなされてきたものの、学生の実態、特に課外活動に関する研究は近年少しずつ進められてきたが、それほど多くはない。個別の大学年史で言及されることはあるものの、それぞれの大学合唱団がどのようなネットワークを有して活動していたのかはまったく検討されてこなかった。そして音楽学における音楽史については、これまでプロの音楽家の活動に関する研究が中心で、大学合唱団のようなアマチュアの団体に関しては研究の対象外であった。

以上のような研究史の動向を踏まえて、本稿は、日本近現代において、大学合唱団がいかに形成され、その後に展開していったのかを概観しつつ、特に高度経済成長・大学紛争前後の社会での位置づけを行っていきたい。大学合唱団を歴史学的に検討する第一歩とすること、それが本稿の目的である。

一　西洋音楽の導入と大学合唱団

西洋音楽が日本へ本格的に導入された近代以降、学校では国民国家の国民づくりの一環として唱歌が歌われた。「国語」を定着させ、天皇制を浸透させるツールとして、みなで一緒に歌うという合唱が動員されたのである。ただし、こうした経験を身につけていった人々は、二十世紀における大衆社会化のなかで流行歌を生み出す原動力になった。その意味では、合唱は政府の意図以上の効果をもたらした。大正三年（一九一四）に発売された日本初の流行歌と言われる「カチューシャの唄」（島村抱月・相馬御風作詩、中山晋平作曲）は島村が主宰する劇団芸術座の公演「復活」の劇中歌であったが、学生・生徒などがそのメロディーを覚え、盛んに歌っていたという[4]。唱歌教育によって西洋音楽の歌に親しんだ若い世代が、歌を歌う土壌が近代に形成されたのである。

また、その大衆社会化のなかで発展した中等・高等教育機関では、明治期後半から関西学院や同志社などのキリスト教系学校などでグリークラブと呼ばれる合唱団が結成されていた。関西学院では明治三十二年（一

八九九）に関西学院グリークラブが、同志社では明治三十七年（一九〇四）に聖歌隊が発足し、明治四十四年（一九一一）には同志社グリークラブとなった。[5] そして、二十世紀日本の大衆社会化のなかで、そうした合唱団はより発展していくことになる。

これらのグリークラブからは作曲家の山田耕筰（一八八六〜一九六五、関西学院グリークラブ出身）などの日本近現代の音楽界を担う音楽家が生まれるなど、大学合唱団は日本の音楽界に対して人材を供給し、それを支える存在だった。つまり、大学に存在していたこうしたアマチュアの合唱団が、日本の音楽界、そして日本社会に大きな影響力を与えていたのである。

長年、関西の合唱界で中心的な立場にあった合唱指揮者の長井斉（一八九三〜一九八五）は、後年、「その時代に一般の合唱団というものもあったんだろと思うんですが、確実に合唱団らしい形を備えておったのは『同志社』と『関学のグリークラブ』ですね」と回想している。[6] 長井によれば、昭和六年（一九三一）に関西学生合唱連盟という大学合唱団の組織までもが結成された。このように、合唱界のなかで、大学合唱団の活動は大きな位置を占めていた。

大学合唱団は、キリスト教主義の大学に限らず、帝国大学などでも設立され、学内の文化団体の中心的立場にあった。京都帝国大学でも、昭和六年（一九三一）に京都帝国大学男声合唱団が創設された。この合唱団は数年後には付近の女学生などの協力も得、混声合唱としての活動も展開していくことになる。ただし、昭和十六年（一九四一）のアジア・太平洋戦争勃発によって、次第に変化を遂げていく。曲は「忠君愛国的なものばかり」で、混声での活動は禁止され、その後にはいわゆる「学徒出陣」などによって男声の団員数も減少していった。[7]

二　敗戦後のサークル活動と学生運動

アジア・太平洋戦争の敗戦後、人々は戦時下での抑圧された雰囲気を解放するかのように、様々な文化活動を復活・展開していった。そのなかの一つに、合唱があった。文化的な活動が称揚される雰囲気のなかで、合唱は戦後民主主義を象徴する文化活動として行われた。全国で大学合唱団が復活・設立され、大学のクラブ・サークル活動の花形として、数多くの学生が参加した。そして、大学における文化活動をリードする立場としての地位を確立していく。

昭和二十一年（一九四六）に日本国憲法発布を記念して開催された関西合唱連盟による第一回合唱コンクール（朝日新聞社後援）では、二一の参加団体があったが、過半数は学校関係団体が占めたという。しかも、関西学院グリークラブや同志社グリークラブの演奏は「群を抜き、その洗練された合唱は当日の圧巻として聴衆に多大の感銘を与へた」と評されるように、[8] 戦中のブランクはあったものの、出場団体数も実力も大学合唱団が他の合唱団を圧倒していた。

このうち関西学院グリークラブは、「歌を以て神に讃美し神に奉仕する」という「宗教音楽に依存する」形をとり、「心の調和」を図り、「合唱によつて人格と教養を深めること」、そして「日常の練習は我々の生命である」というように、発表のために練習をするのではなく、むしろ自己のために練習をすることが発展の要因と見られていた。[9] コンクールで勝ち抜くために技術を高めるというのではなく、歌うという活動自体への取り組

みが、結果的に評価されていたといえる。それは、戦時下で活動できなかった大学合唱団が、敗戦後の社会的変化によって自由に歌えるようになったため、それを彼ら彼女らは謳歌していたとも考えられるだろうか。

このように大学合唱団が合唱界をリードしていたという状況は、関西だけではなかった。昭和二十三年（一九四八）に開催された第二回関東合唱コンクールの講評でも、大学高専の部は「みんな揃つて上手で点のつけように困つたくらいでした」「中等学校の部は指揮者に引つ張られて歌つているという感じがするが、大学高専は何といつても楽しんでいるからね」と言われるように、[10] 大学合唱団はやはり自分たちが楽しんで活動し歌う姿が評価されていたのである。

一方、戦後の大学では敗戦後の「民主化」の流れに乗って学生運動が盛んで、社会運動や政治運動を積極的に行っていた。そうした運動の場では、参加者がみなで歌を歌って団結することが目指され、大学合唱団の歌がそれらの運動を盛りあげるなど、運動のなかで主導的な立場を担うこともあった。

さらに戦後には、日本共産党の文化工作の一環として、うたごえ運動も開始されていく。敗戦後、社会運動が盛んとなり、それとともにうたごえ運動はより人々へと広がっていった。一九五〇年代前半に各地で頻発した基地反対闘争や労働争議において、それを支援するため、全国からうたごえ運動の担い手たちが駆けつけ、党派性を超えて社会運動を鼓舞するように歌を歌っていく。[11] さらにうたごえ運動が、それまで合唱に携わってこなかったような人々に対し、まずは楽しく大きな声で歌うように求めるような、いわば門戸を広げる活動を展開したことも、この運動が社会に広がる要因となった。

その後、紆余曲折はあったものの、昭和三十四年（一九五九）から翌年にかけての三井三池争議、そして昭和三十五年（一九六〇）の日米安全保障条約改定をめぐる安保闘争など、社会運動が高揚する「政治の季節」のなかで、うたごえ運動もその運動は最高潮に達していく。[12]

大学においても、学生運動が行われるなかで、うたごえ運動に参加する合唱団は数多くあった。京大合唱団もその一つである。昭和二十五年（一九五〇）の京都におけるレッド・パージに対する反対闘争[13]では、「今迄学生運動から全く逃避していた演劇部、京大合唱団が闘いの先頭に立っている」と評価された。[14] この時期に「逆コース」が進展するなかで、学生運動に参画していく京大合唱団の状況が読み取れる。さらに、昭和二十八年（一九五三）の京都大学の学生と警官隊が衝突した荒神橋事件[15]では、衝突後の抗議集会で京都女子大学のコーラスが「若者よ」（ぬやまひろし作詩、関忠亮作曲）を一曲合唱して抗議団を組織するように提案し、その後に京大合唱団の合唱などが続いたという。[16] この時、京大合唱団が何を歌ったのは不明であるが、京都女子大学のコーラスが歌った「若者よ」はうたごえ運動でよく歌われる曲であったことから、京大合唱団もそうした種類の曲を歌ったのではないだろうか。

そして、昭和二十九年（一九五四）の文章には、京大合唱団について次のような評価が書かれている。

> 特に京大は二十数年の歴史と、団員百余名を擁する京大合唱団を始め、音楽研究会（音研）、デイスク・サークル（レコード鑑賞会）その他数多くの歌うサークルが組織されており、「社会に明るい歌声を」のスローガンの下に、或は災害地救援に、工場労働者の慰安に、

或は演奏旅行、発表会にとエネルギッシユな活動を続けているのである。……もとより合唱運動は京大のみが盛んであるというのではなく、今年のメーデー前夜祭にも見られる様に職場、地域、学校を問わず盛んに行われているのである。……学校では立命館大学の団員二百名を擁するといわれる「音痴合唱団」、同じく夜間学部の「屋根裏コーラス」などがある。その他合唱を真接の目的としないまでも映画演劇、文学、音楽等の各種文化団体、集団もその活動の中で合唱を取上げており、又職場の演劇サークル、学生劇団などが好んで演ずる所のシユプレヒコールと呼ばれる演劇形式もこの合唱が主要な役割を果しているのである。

この様に今や合唱運動は職場、地域、学校などあらゆる所で繰りひろげられ、左翼文化活動の花形として重きをなしている。

▼合唱運動がこの様に盛んになつたのは、要するに巧く歌おうというのでなく、「皆んなで楽しく歌う」という合唱の持つ大衆的芸術性に起因するものと考えられるのであるが、看過出来ないのはこの運動が自然発生的に盛んになつたのではなく、左翼分子の意識的な指導による事が多いということである。

▼京大合唱団なども最近では「赤い合唱団」などと余り有難くない異名を奉られているようであるが最近の活動ぶりから推して一部の指導的学生に共産党細胞が潜入している事は充分推察されるのである。……もつとも「平和の歌」や「民族独立行動隊の歌」ばかり歌つていては、所謂遅れた大衆から遊離する虞れが多分にあるので、民謡や安来節などまで線を引下げて歌わなくてはならないだろうがつまりこういう戦術が大衆路線ということであろう。[17]

もともと、うたごえ運動は民謡を重視していたことから、この時期の学生運動や社会運動において、こうした曲を歌うのが戦術としての大衆路線であるというのはやや正確ではない評価であるが、大学内における位置づけ、社会運動における位置づけにおいて、合唱が重要視されていた様子がよくわかる。うたごえ運動と結びついた京大合唱団の活動は、京大内にとどまらず、京都の社会運動全体にも大きな影響力があり、さらに立命館大学などにもそうしたうたごえ運動に参加する大学合唱団があって（団員数が二百人もいたという）、横のつながりをも有していたのである。しかも、京大合唱団に参加し、うたごえ運動にも力を注ぎ、大学の文化サークル協議会を通じてデモやメーデー前夜祭などにも参加していた人物は、大学の自治会活動では中心的ではなかったという証言もある。それは、うたごえ運動が単に共産党やそれに影響を受けた自治会の活動にとどまらず、学生に広く浸透していたことを示す例であろう。[18]

また、同時期の東京女子大学の服部文子（東京大学柏葉会合唱団に所属）の日記には、東京女子大学の学生大会で原水爆禁止総決起大会に全学生が参加することが決議され、日比谷の野外音楽堂に出かけていった様子が記されている。[19] そこでは、バスに乗ったところで「国際学生連盟の歌」（東大音感合唱団訳詩、ヴァノ・ムラデリ作曲）の指導が始まったこと、しかし服部は「今まで、デモに加わつた事が無いので余り聞いたことがなかつた。もう少し学生らしく若々しい明るい歌だと良いのに、と思つたりした」という。さらに、「民族独立行動隊の歌」（きしあきら作詩、岡田和夫作曲）についても「露骨な感じ」と批判的な感想を寄せている。このように、彼女はうたごえ運動で歌われた曲に対して批判的で、その後

に歌われた「七つの子」や「夕焼け小やけ」「ローレライ」など童謡の方が「本当に平和の歌ではないかしらと思つた」という。この集会を「米英だけを一方的に責める内容」で「何だか割り切れぬ感じ」を受けた服部も、しかし集会に参加し、みなと一緒に歌った。彼女と同じようにどこかで疑問を持ちつつ、しかし「平和」は重要であるとの意識を持ちながら、社会運動に参加してうたごえ運動で歌われるような歌を歌っていた学生は多くいたのではないか。

さらに、大学合唱団はすべてうたごえ運動や社会運動に参加していたわけではなかった。関西学院グリークラブはすべて学生の手で運営されており、「毎日を本当にたのしく和気あいあいと練習に励んでい」ること、同志社グリークラブは百五十人の大所帯ではあるが「部員相互の温い友情はたのしい雰囲気となつてたくましい活動の源をつくり出します」と述べられるように[20]、学生運動とは関係なく戦前以来の伝統を守りつつクラブ的な雰囲気で活動を展開する大学合唱団もあった。そして、学生の音楽活動が盛んであることを伝える記事が同時期に掲載され、コンクールで活動する合唱団や各校の交歓演奏などで交流が行われたりしていることなどが紹介された[21]。

三　大学紛争と大学合唱団

しかし昭和三十五年（一九六〇）を境に、社会の雰囲気は一変する。日米安全保障条約改定をめぐる運動は挫折し、日本社会は「政治の季節」から「経済の季節」へと転換する。高度経済成長が本格化するなかで、社会運動も停滞する。その結果として、うたごえ運動もその方針などをめぐって分裂するなど様々な影響を受けた[22]。

大学合唱団はさらに深刻な問題に直面していく。第一に問題になったのは、運営のあり方であった。同志社グリークラブ出身の評論家であった日下部吉彦（一九二七～二〇一七）は、昭和三十九年（一九六四）に「学生合唱団と指揮者」という文章を書いている[23]。そのなかで日下部は、大学合唱団が指揮者にプロを迎える傾向が目立ってきたとし、それは「学生の音楽団体は本質的に芸術団体なのか、それとも単なる学生の同好趣味団体であるのか」という問題を突きつけていると述べる。実力をともなっていた大学合唱団は、時として「日本の合唱界で最高レベルの演奏をすら出来得る力を持ち、また聴衆もそれを期待している」。しかし、大学生である以上、当然に学業があって、「合唱生活を通して円満な社会人としての情操を養うといういき方がある」。どちらを採るべきなのか。ここには、大学合唱団の技術が成熟し、社会からの要求が高くなるなかで、さらにレベルを高めようとすればどうすべきなのか、という問題が根底にあった。さらに練習を積み重ねるとすれば、練習量は増え、大学生としての本分を損なう可能性も出てくる。そのためにも、プロの指揮者を招き効率のよい練習をという方向性になろうが、しかしそうすれば、学生の手で運営されてきた伝統を損ねる可能性も出てくる。しかも、学生運動を経てきた大学生からすれば、プロの指揮者を招いて外部の助けを借りることは、大学自治の精神に反する可能性もあった。日下部は、単にプロの指揮者が大学合唱団にやって来て指導するだけではなく、学生のなかに積極的に入っていく必要性をここでは説いた。それによって、大学合唱団に「芸術団体」でありながら「学生の同好趣味団体」としての側面も、両方獲得させようとしたのではないだろうか。

さらに、同志社グリークラブなどで大学合唱団にかかわっていた指揮者の福永陽一郎（一九二六～九〇）は、昭和四十一年（一九六六）に「大学合唱の現状と課題」という文章を発表し、大学合唱団の問題を提起した。[24] 福永は「昨年ほど合唱団の地域差やレベル差を、痛いほど知らされたことはなかった」と述べて文章をはじめ、大学合唱団も例外ではないとする。大学合唱団のレベルが高いというのは、東京や関西のごくわずかのハイレベルの合唱団のことであり、では世間がそう認識するのは、「明らかに異常」な練習量に支えられているからだと福永は主張する。しかし、「それは、ものごとに対する熱中という度合いを、はるかに過ぎている」。しかもその練習量を支えているのは学生指揮者であるが、指揮者の仕事が本当にこなせるようになるのは時間もかかりしかも優れた人材が毎年のように現れるわけでもない。であるとするならば、プロの指揮者に依頼ということになるが、お金もかかり、しかも技術的には向上するかもしれないが、「『良い音楽』は与えられるものだ、という受動的な観念が支配する危険な兆候がある」。福永はそれゆえ、「大学合唱団の諸問題は、けっきょく、その合唱団個々が思考を煮つめるよりしかたがないのではないか。そうした『思考を煮つめる作業』をすることが、クラブ活動であろう」と主張する。福永は大学合唱団の技術的な問題を取りあげつつ、プロの指揮者の立場から、その向上のために単に専門家に頼るのではなく、大学の合唱団らしく、学生が運営をめぐって考えることを提起したのである。[25]

このように福永が主張した背景には、この時期の大学をめぐる問題があった。昭和四十一年（一九六六）六月に開催された東京六大学混声合唱連盟第八回定期演奏会では、早稲田大学混声合唱団が「おりからの学内ストのため、練習不足もあって、合同演奏には参加を辞退し」ていた。[26] ここにもあるように、早稲田大学では前年末より学費値上げや学生会館管理問題に端を発した早大闘争[27]が始まっていた。この闘争はいわゆる活動家の学生だけではなく、政治党派に属してはいない一般の学生が広く参加し、キャンパスの封鎖といったストライキ・実力行使をともなったものであった。それゆえ、サークル活動・合唱団活動にも大きな影響を与えたのである。早稲田大学は学内ストにより、合唱団は「明らかに異常」な練習量をこなせなくなる状況となり、しかも外部に頼ることも難しくなる。福永の提起は、こうした大学をめぐる環境の変化を踏まえてのものであった。

そしてその後、『合唱サークル』という雑誌で、「学生合唱団の問題点は何か？」という特集が組まれた。大学合唱団にもかかわっていた合唱指揮者の山根一夫（一九一四～九五）は、「日本の大学合唱は問題がありすぎる」と批判し、「その最大なものは技術偏重論にまどわされていることである」と断じた。[28] コンクールで上位の成績を取ることを含めて、大学合唱団がそうした風潮になっており、合唱本来のあり方をもっと追及すべきではないかと山根は問うた。特に、大学合唱団はもっと練習のなかで責任と「協同の苦しみ喜びをともにした友情の高まり」を意識し、それによって人間的に成長することが重要ではないか。山根のこの問いは、福永の提起と軌を一にするものであったと思われる。学生運動によって大学のあり方が問われるなかで、大学合唱団も伝統的なあり方のままでよいのか、問い直されなければならないという考え方が、それにかかわる指揮者のなかから出てきたのである。

さらに、この特集では大学生自身の声も取りあげられた。[29] 東京大学コ

ールアカデミーの古井貞熙（一九四五～二〇二二）は、「個人個人が自分の殻にとじこもってしまっているため、メンタルハーモニーに乏しい」「一人一人の合唱に対する意欲、姿勢のすれちがいが、一つにまとまる傾向を欠く」と述べ、合唱の効果であるみなで一緒に歌うことの意義が薄れてしまっている現状を指摘している。技術への偏重だけではなく、大学の意義について問われているなかで、合唱団において人間関係が疎隔になっている状況が問題点として指摘されたのである。

一方で、『合唱サークル』ではその後も各地域の大学合唱団が取りあげられたが、みなで取り組むことの問題性を取りあげられたこともあった。[30] 名古屋大学男声合唱団での百数十人いる練習では、「まさに物量的合唱」で「危ない声も聞こえてくるがいちいち注意もあたえない。強引に馬力で押していく」ものであった。技術偏重とは異なる姿である。学生指揮者の指示に対して、団員からたくさんの意見が出され、そして練習が進んでいく。その意味では、みなで一緒に歌うことが重視されていた。実際、彼らが歌っている曲は日本民謡やうたごえ運動のなかで生まれた創作曲で、まさにこうしたあり方はうたごえ運動そのものであった。しかし、この練習を見た作曲家の石井歓（一九二一～二〇〇九）は、学生との座談会のなかで「適度に話し合うということは必要だけれども、最後の最後はやはり指揮者が音楽を作り出す最高責任者」であり、専門家の関与も必要だと主張する。[31] ここには、社会運動や学生運動と密接に関わっていたうたごえ運動のあり方は否定され、それでは技術的に向上しないという見方が提示されている。以上のように、大学のあり方が問われているなかで、大学合唱団の現状や今後についても議論が展開されるようになったのである。

そして、こうした状況を経て第二に問題になったのが、昭和四十三年（一九六八）から翌四十四年（一九六九）にかけて全国各地の大学において続けられた大学紛争の激化であった。新左翼の学生らによって結成された全学共闘会議（全共闘）によって行われた闘争は、大学当局だけではなく、共産党の影響を受けた日本民主青年同盟（民青）系の学生とも対立していた。民青系の学生たちはうたごえ運動と親和性があったものの、大学紛争の主流派であった全共闘系の学生たちにとって、共産党とも関係が深いうたごえ運動は忌避する対象だった。そして彼らが運動のなかで歌った歌は、うたごえ運動の合唱ではなく、フォークソングであった。しかしその大学紛争も、最終的には沈静化された。

こうした状況を踏まえて福永陽一郎は、昭和四十四年（一九六九）に「大学合唱のゆくえ」という文章を書き、再び大学合唱団に対する問題提起を行った。[32] そのなかでは、「現在ほど、大学の合唱団が、複雑で困難な時期をむかえていることは、かつて日本には一度もなかったのではないだろうか」と述べている。つまり、戦時期の「学徒出陣」のように大学に学生がいなくなり、合唱が取り組めなくなった時期などのように、これまでも大学合唱には何度も危機があった。しかし、福永によればそれは「たとえ悲劇的ではあっても、単純に他動的な様相であって、『大学合唱はどうあるべきか』という本質的な問いかけへの答を用意しなければならない事態ではなかった」という。ところが現在は異なる。大学紛争は大学の存在そのものへの懐疑であり、なぜ大学で歌うのかという問題を突きつけたからである。

しかも、どこの大学合唱団もこの時期、それまでよりも団員数が減少していた。やはりその根本的な理由は、大学合唱団の本質的な部分が問

われていたからだろう。また、大学紛争後の影響で、学生たちのなかにうたごえ運動のような政治的なものの忌避感が生まれた。その結果、大学合唱団へ参加する学生の数は減少していく。それは、うたごえ運動に傾倒した合唱団だけではなかった。さらに、大学紛争における敗北という雰囲気のなかで、合唱団という団体活動、しかもそのなかで練習に真摯に取り組むという行動自体が、学生たちから次第に拒絶されていったのである。大学紛争後の学生に広がったある種の「しらけ」が、大学合唱団の停滞を招いていくことになる。

四　大学紛争後の合唱

高度経済成長によってレジャーは多様化し、その後、人々は個々で様々な余暇を過ごすようになった。たとえば、カラオケボックスに若い人々が連日集まり、密室で個々に歌を歌うようになる。合唱のように一緒に歌うことから、少ない人数で好きな歌を歌う形が一般化していったのである。[33] 趣味の多様化ともいえる現象だろう。それまで発刊されていた合唱専門の雑誌も、一九七〇年代に数多くが廃刊となった。[34] それは、商業的に採算が取れないためであり、それだけ合唱が低迷したことを示している。

では、大学合唱団はそのまま単に衰退の道をたどったのだろうか。そうではない。学生たちは様々な模索をしていくことになる。その一つが、次の文章にあらわれている。

合唱がだんだんウケなくなってきている。このままBOXの中で趣味的にやっていくだけならば合唱団も縮小再生産を繰り返すだけである。もし合唱団が合唱のより広い支持、社会的基盤を望むならば、社会に対しての合唱団の働きかけが当然必要とされるわけである。すなわち、合唱の世界の外に向かっては、一般の人達の合唱に対する理解を深めてもらおうとし、内に向っては、合唱それ自体を、彼等の欲求を満足させるような形に変化させていこうとする努力が期待されるのである。演奏旅行は、合唱団の社会に対する働きかけの手段として非常に有力なものである。[35]

これは、京大合唱団に参加していた学生が、昭和四十八年（一九七三）に団の機関誌に書いた文章の一部である。京大合唱団は、敗戦後の社会の自由な雰囲気のなかで、団の運営も民主化されていた。また、うたごえ運動に参加することで、その規模を拡大していった。しかし、社会状況が変化していくのと軌を一にして、団内でも様々な議論・対立が生まれるようになり、昭和四十一年（一九六六）に分裂騒動を起こす。それを機に、お互いの意見を言い合い話し合う機会がより重要視されるようになった。この資料が書かれたのは、こうした経験を経た時期である。京大合唱団では機関誌が様々な機会に発行され、団員同士が自分の意見を表明する場になっていた。

この文章が書かれた昭和四十八年（一九七三）、京大合唱団は同じ京都府の宮津市など丹後地方へ演奏旅行に出かけようとしていた。この学生は、世間のなかで合唱が「ウケなくなって」きていることを嘆くような思考を吐露しつつ、一方で「社会に対する働きかけ」としての合唱が必要だと自らの行いを鼓舞しているかのような書きぶりを見せた。高度経

済成長によって多様化している社会のなかで、自分たちの合唱は人に届くのだろうか。このように自問した学生たちもただ手をこまねいていたわけではなかった。演奏旅行という形で、人々に合唱を広げ理解してもらう活動を展開していく。「社会に対する働きかけの手段」という学生の言葉はその意思を示している。これは、うたごえ運動の手法が、形を変え、継続されたものでもあった。

このように、うたごえ運動の方向性をさらに追求しつつ、合唱に取り組む学生たちもいた。昭和四十八年（一九七三）に実施された名古屋大学男声合唱団第一九回定期演奏会のレポートを見てみたい。[36] このときの演奏会は四ステージあり、そのなかにはジャマイカ民謡や「たたかいの中に」（高橋正夫作詩、林光作曲）などが歌われるステージがあった。各国の民謡はうたごえ運動のなかで重視されており、さらに「たたかいの中に」は昭和二十七年（一九五二）のいわゆる「血のメーデー事件」において射殺された高橋正夫（一九二九〜五二）の遺稿に曲が付されたもので、うたごえ運動で歌われていたものであった。また、最後のステージは寺原伸夫（一九二八〜九八）によって新しく作曲された「機関車」という曲が披露された。寺原はソビエト連邦のモスクワ音楽院に留学した経歴を有し、うたごえ運動で広く歌われた作曲家であった。林や寺原の曲がプログラミングされていたことからもわかるように、名古屋大学男声合唱団は大学紛争後も、うたごえ運動の歌を積極的に歌っていたことがわかる。

名古屋大学男声合唱団は、「国民音楽の創造」を団のスローガンに掲げていた。それを目指して、作曲家への委嘱活動を展開しており、この「機関車」については「素直な音の集りと進行、構成になる作品」で、学生たちが「気に入った詩を存分に声を張り上げて歌い切りたいという若人の一途な気持をとらえてくれる作品」と評価された。それは、まさにうたごえ運動が目指した方針と合致していた。多くの人々に歌われるような曲をみなで歌う。そうした意図がこの演奏会にはあったと思われる。演奏会は約二千三百人が定員である名古屋市民会館大ホールにおいて一月十五日、二十三日の二日間にわたって開催されたことからもわかるように、こうした方向性はこの時期にあっても多くの観客を集めるほどに、一定程度の影響力を有していたのである。

もちろん、大学合唱団が展開したのはこうした方向性だけではなかった。関西学院グリークラブは学生のみでの運営を変え、常任指揮者に出身者でありプロの指揮者であった北村協一（一九三一〜二〇〇六）が就任する。それでは、関西学院グリークラブは技術偏重に傾いたのか。そうではない。コンクールの出場を止め、定期演奏会に全力を注ぐことにし、技術力を向上させつつ、しかしそれだけに傾倒しない方向性を追求していくことになる。[37] このように、関東や関西の大学合唱団では、プロの指揮者を招き、技術力を高めていく形で、あり方を問われていた大学合唱団を再興しようとする動きが見られた。もちろん、単にプロの指揮者に依存するのではない。福永が提起したように、彼ら自身も単に大学合唱団にやって来て指導するだけではなく、学生のなかに積極的に入っていく。そして、一緒になって技術力を向上していく方向性を追求していった。

おわりに

大学合唱団は、近現代の日本社会の様々な影響を受けつつ、継続して

活動が展開されてきた。戦前の歴史も、敗戦後の「民主化」の流れに乗って復活・活動したことも、「政治の季節」にともなう社会運動の風潮に沿うことも、大学合唱団は社会とともにあった状況を示しているといえる。そして、発展していった。

しかし、大学紛争は大学のあり方を問うものであり、それは大学合唱団のそれにも波及することになる。学生のみの自治的な運営でよいのか、技術力偏重主義になっていないのか、団員同士の結びつきはどうなのか。それは、近代になって日本に登場した大学合唱団の存在意義が初めて根底から問われたものであったともいえる。

その後、全体としては、社会状況の変化のなかで、団員数が百人以上の規模を誇り、二千人規模の会場での演奏会を場合によっては複数回開催するような大学合唱団は次第に減少していく。しかし一方で、大学紛争・高度経済成長を経て、大学合唱団のあり方は変化していき、形を変えて、現在まで継続していくのである。

【付記】本稿は、JSPS科研費17K03116の助成を受けたものであり、令和三年度伊藤忠兵衛基金研究助成「大学合唱団の歴史的展開と日本社会に関する研究」、令和四年度一般財団法人カワイサウンド技術・音楽振興財団研究助成「日本近現代における大学合唱団の歴史的意義」の成果の一部である。

注

(1) なお、大正七年（一九一八）の大学令制定以前の私立の専門学校は厳密な意味では大学ではないが、それによって大学へと移行したことから、これ以前に存在していた合唱団も本稿では大学合唱団として取り扱う。

(2) 『京都大学新聞』一九六三年二月二十五日。

(3) ここでは、昭和三十年（一九五五）ごろから昭和四十八年（一九七三）ごろまでを想定する。

(4) 永嶺重敏『流行歌の誕生』（吉川弘文館、二〇一〇年、四五〜四七頁）。

(5) 関西学院については山中源也『関西学院グリークラブ八十年史』（関西学院グリークラブ部史発行委員会、一九八一年）、同志社については同志社大学グリークラブ三十年史編纂委員編『創立参拾周年紀年號』（同志社大学グリークラブ、一九三四年）を参照。

(6) 長井斉ほか「関西合唱の伝統と現状を語る」（『合唱サークル』第一・二号、一九六六年、三四頁）。

(7) 長井ほか前掲「関西合唱の伝統と現状を語る」三五頁。

(8) 『学園新聞』一九四六年十一月十一日。『学園新聞』はこの時期の京都帝国大学の学生新聞である。

(9) 「合唱団めぐり　関西学院グリークラブ」（『合唱の友』創刊号、一九四八年、一四〜一五頁）。

(10) 清水脩司会「第二回関東合唱コンクール合評会」（前掲『合唱の友』創刊号、一八〜一九頁）。

(11) うたごえ運動については、河西秀哉『うたごえの戦後史』（人文書院、二〇一六年、第三章）を参照のこと。

(12) この過程は、河西秀哉「うたごえ運動の一九六〇年代―運動方針の変化から―」（『年報・日本現代史』第二六号、二〇二一年、四四〜五一頁）を参照のこと。

(13) この問題については、河西秀哉「敗戦後における学生運動と京大天皇事件―「自治」と「理性」というキーワードから」（『京都大学大学文書館研究紀要』第五号、二〇〇七年、二三〜二五頁）、京都大学百二十五年史編集委員会『京

都大学百二十五年史　通史編』（国立大学法人京都大学、二〇二二年、二三六頁）などを参照のこと。

(14) 昭和二十五年（一九五〇）十一月二十九日、京大同学会・京都府学連書記局「京都に於ける反レッド・パージ闘争」（三一書房編集部編『資料　戦後学生運動資料』第二巻、三一書房、一九六九年、二四一頁）。この事件については、京都大学百二十五年史編集委員会前掲『京都大学百二十五年史　通史編』二三八〜二三九頁を参照。

(15) 昭和二十八年（一九五三）十一月十二日「全学新共同デスク・特報」（三一書房編集部編『資料　戦後学生運動資料』第三巻、三一書房、一九六九年、二三七頁）。

(16) 藤澤誠次郎「最近の学生運動の動向―京大同学会本年度の活動方針―」（『現代人』第二巻第八号、一九五四年、三七〜三九頁）。なお、こうした動向は京大だけではなく、東大も有していたようである（上坪陽「激動の大学・戦後の証言㉗　うたごえ運動」『朝日ジャーナル』第一二巻第二〇号、一九七〇年、三一〜三五頁）。

(17) 大野力「学生運動家の存在意義（3）」（『中央公論』第八一巻第一一号、一九六六年、一三九〜一四〇頁）。なお、この人物は京都のK印刷の営業部次長I氏と仮名である。彼は「企業のなかでは、コーラスなんかやっても、出世の役には立ちません……しかしわれわれの仲間をみると、みんなずっとコーラスをやってる者が多いですね。これだけでも立派だと思います」と証言しており、合唱で構築された人間関係や思考が就職した後にも生き続けていることを提起している。

(18) 服部文子「女子大生の日記抄」（臼井吉見・河盛好蔵編『大学生―この考える葦』潮文社、一九五八年、一九三〜一九八頁）。

(19) 磯部俶「合唱団訪問（8）　関西学院グリークラブ・同志社グリークラブ」（『音楽の友』第十五巻第八号、一九六二年、四六〜四七頁）。

(20) 「楽壇の人気者も生まれて　お盛んな学生音楽熱」（『週刊娯楽よみうり』一九五六年十月十二日号、三八〜四〇頁）。

(21) 河西前掲「うたごえ運動の一九六〇年代―運動方針の変化から―」五一〜五五頁。

(22) 日下部吉彦「学生合唱団と指揮者」（『音楽の友』第二二巻第二号、一九六四年、一四五頁）。

(23) 福永陽一郎「大学合唱の現状と課題　問題点はなにか」上・下（『旬刊合唱新聞』一九六六年二月十日、二月二十日）。

(24) こうした提起があった一方、大学合唱団の演奏会は盛況だったようで、たとえば関西六大学合唱連盟（神戸大学グリークラブ、同志社グリークラブ、立命館大学メンネル・コール、関西学院グリークラブ、京都大学合唱団、関西大学グリークラブ、演奏順）第二回演奏会では、定員約二七三〇人の大阪のフェスティバル・ホールで「開演時間を待ちかねたファンが、会場の前に長く並び、ホールは立錐の余地がないほどの盛況」であったこと（『旬刊合唱新聞』一九六六年五月二十日）、日本女子大学合唱団第一一回定期演奏会が定員約二千人の東京厚生年金会館大ホールで開催され、「つめかけた聴衆で超満員の盛況」であったこと（『旬刊合唱新聞』一九六六年六月二十日）、東京六大学合唱連盟（立教大学グリークラブ、東京大学コール・アカデミー、明治大学グリークラブ、慶應義塾ワグネル・ソサエティ、法政大学アリオン・コール、早稲田大学グリークラブ、演奏順）第一五回合唱演奏会は定員約二千三百人の東京文化会館大ホールで午後一時半と午後六時の二回開催され、「昼夜とも、さしもの大ホールを満員にする盛況」であったこと（『旬刊合唱新聞』一九六六年七月十日）、早稲田大学グリークラブ第一四回定期演奏会が十二月三日・四日の二日間にわたって定員約二千八十人の渋谷公会堂と東京厚生年金会館大ホールで開催され、「両日とも、ほぼ満員の聴衆が客席を埋め」たこと（『旬刊合唱新聞』一九六六年十二月十

(25)

日）が報じられるなど、世間では大学合唱団への期待感は高かった。ただし、東京六大学混声合唱連盟（玉川大学合唱団、早稲田大学混声合唱団、青山学院大学グリーン・ハーモニー合唱団、慶應義塾大学混声合唱団楽友会、法政大学アカデミー合唱団、東京大学柏葉会合唱団、演奏順）第九回定期演奏会について報じた記事では、「ここでも指導陣に専門家を得ている団体が、やはり音楽的にも芯がとおっているといえる」と評価された（『旬刊合唱新聞』一九六七年六月二十日）ように、プロの指導者の問題がついてまわったのも事実であった。

(26) 前掲『旬刊合唱新聞』一九六六年六月二十日。

(27) 早稲田大学大学史編集所編『早稲田大学百年史』第五巻（早稲田大学出版部、一九九七年、三七五～四五四頁）。

(28) 山根一夫「大学合唱団への期待と助言」（『合唱サークル』第一巻第四号、一九六六年、一八～一九頁）。

(29) 佐藤公春「大学合唱団の現況を分析する」（前掲『合唱サークル』第一巻第四号、二八～二九頁）。

(30) 「ルポタージュ　中京地区の合唱団訪問記」（『合唱サークル』第一巻第八号、一九六六年、三三～三四頁）。

(31) 「石井歓氏を囲む名古屋大学合唱連盟の集い」（前掲『合唱サークル』第一巻第八号、三六～三八頁）。

(32) 福永陽一郎「大学合唱のゆくえ」（『合唱サークル』第四巻第一〇号、一九六九年、五二～五四頁）。

(33) 佐藤卓己「カラオケボックスのメディア社会史―ハイテク密室のコミュニケーション」（『ポップ・コミュニケーション全書―カルトからカラオケまでニッポン「新」現象を解明する』ＰＡＲＣＯ出版局、一九九二年）。

(34) 横山琢哉「現代の合唱」（戸ノ下達也・横山琢哉編『日本の合唱史』青弓社、二〇一一年、一二一～一二五頁）。

(35) 「48年度府下演旅機関誌」（京都大学大学文書館蔵『京大合唱団関係資料』合唱団一―五―三―十四）。

(36) 以下、洞谷吉男「音楽会評　名古屋大学男声合唱団第一九回定期演奏会」（『音楽の世界』第一二巻第三号、一九七三年、二六頁）。

(37) 日下部吉彦「関西学院グリークラブ　白牛から白馬へ」（『合唱サークル』第五巻第一号、一九七〇年、四九～五一頁）。

著者プロフィール

河西秀哉（かわにし・ひでや）　昭和五十二年（一九七七）愛知県生まれ。名古屋大学文学部人文学科日本史学専攻卒業、同大学院文学研究科博士課程後期修了。博士（歴史学）。京都大学大学文書館助教授、神戸女学院大学准教授などを経て、名古屋大学人文学研究科准教授。

主要著書：『「象徴天皇」の戦後史』講談社選書メチエ、平成二十二年。『皇居の近現代史開かれた皇室像の誕生』吉川弘文館、平成二十七年。『明仁天皇と戦後日本』洋泉社、平成二十八年。『うたごえの戦後史』人文書院、平成二十八年。『天皇制と民主主義の昭和史』人文書院、平成三十年。『近代天皇制から象徴天皇制へ「象徴」への道程』吉田書店、平成三十年。『平成の天皇と戦後日本』人文書院、令和元年。

共編共著：『戦後史のなかの象徴天皇制』吉田書店、平成二十五年。『平成の天皇制とは何か』岩波書店、平成二十九年。道場親信・河西秀哉編解題『「うたごえ」運動資料集』並製普及版、金沢文圃閣、令和二年。